

やがて、次の世に渡るとき、好きな数の七つの梨を土産にもってゆこう。

ひとつは昭和二十七年の秋、貧しい村で貧しい人達に棟上式の餅をまいた、気っ風のよい宇田志づさんにすぐ届けよう。その時にひろった紅白の丸い餅五つが一生で一番美味しい餅でしたと、述べよう。志づさんは、女優の津島恵子さんによく似ておられた。

ひとつは、中学の国語の先生、鈴木直さんに渡し、先生が、僕の作文、「誰れもが自由に働ける社会」をほめて下さったお蔭で文学に親しめるようになれました、と初めて告白しよう。先生は、何んとおっしゃるだろう、楽しみだ。

三つ目は、僕に「力」という名をつけて下さった、父に剥いてあげよう。一生、力はなかったけれど名に励まされて生き切りましたと、両手をつけて礼を申そう。父は、あの頃のように頭を撫でてくれるかな。

生涯に、万以上の数にのぼる唄をお書きになられた、西條八十先生に駆け足で二つ届けよう。

なかでも「誰れか故郷を想はざる」は、僕にとって、酸素だ、水だ、光だ。風の吹かぬ日はあっても、この唄を聴かぬ日はない。

先生は、梨のひとつを、親友の作曲家、中山晋平さんに差しあげると思う。

今、大好きな男を想い出した。昭和三十一年頃、南伊豆の温泉村に流れてきた旅役者の長さんに会いにゆこう。梨を手みやげにして、長さんは小粋でいい男だった。三十を越えていたろうか、長さんの「瞼の母」は絶品だった、十四才の僕は嗚咽した。そして開幕に踊った、「妻恋道中」には手が腫れたほど拍手を贈った、一本刀と三度笠の踊ようは今でもすべて思い出せる。いただいたサインを示して、長さんと夜明かしで呑もう。

残りのひとつは、自分の物にしよう。昔、おっ母さんと、海を眺めながら、握り飯を頬張った、あのみかん山へ行って、

おっ母さんにむいてもらおう。ぼくは我慢して梨が大好きなおっ母さんにみなあげよう。

おっ母さんは、おいおい泣いて、力よお食べ、力よお食べというにちがいない。